



記憶は鞍山だった

生まれた街、奉天に
行こうと思ったのは六
十五歳で会社を辞めた
二〇〇五年。日刊「新
周南」の創刊二十周年
企画「瀋陽（奉天）



鞍山に列車は止まっただけ

大連・旅順四日間」と
いう今回と同じコース
の旅が実施された時
だ。
参加したかったが、
すでに退職記念で妻と
「麗しの東欧四方国周
遊八日間」の旅に申し
込み、日程が重なって
いて実現しなかった。
日刊「新周南」の旅
は、児玉源太郎ゆかり
の街を訪ねて」という
タイトルで、二十六回
にわたって橋詰主幹が
連載された。
今回、出発前に改め
て読んだが、歴史的な
出来事が詳しく書かれ

二〇三高地のロシア軍砲台跡



ている。重複を避け、
私の旧満州巡礼記は生
まれた地だけとして今
回で終わる。
実は長い間、私の中
に残るわずかな旧満州
時代の記憶は奉天のも
のと思っていた。
今回の旅にあたって

記録を調べてみると、
それらは奉天時代では
なく、鞍山時代のもの
とわかった。
教師だった父は昭和
十一年、南満州鉄道会
社に出世を命じられ、
奉天千代田尋常高等小
学校に赴任した。私は

そこで昭和十五年に生
まれた。
その後、視学として
チチハルに行き、昭和
十九年、鞍山大宮国民
学校校長として鞍山に
赴いた。

「引揚げ者の居住の
状況」では昭和十九年
七月から戦後の昭和二
十一年七月まで二年
間、鞍山大宮通りの満
鉄社宅に住んでいた。
母がサツマイモを蒸
し、切って乾したもの
を八路军の兵隊が持ち
去ったという許し難き
子どもの
記憶は鞍
山時代の
もので、
幼少の六
年間の旧
満州を訪
れるのな
ら、第一

今回、
に鞍山を
訪れるべ
きであっ
た。



乃木大将が建てた慰霊塔

瀋陽（奉天）から大連
への鉄道で列車が鞍山
駅に止まった。あわて
てデジカメでホームの
駅名を写したが、人口
七百万人を超える瀋陽
とは違い、ここなら住
んでいた「大宮通り」
もわかるような気がし
た。もう一度、旧満州
を訪れ、今度は鞍山に
行こうと思う。

最後に旅順の二〇三
高地にだけはふれてお
きたい。旅順守備のカ
ナメとしてロシア軍が
死守していた二〇三高
地を、ロシア軍の三倍
以上の一万五千を超え
る死者を出しながら乃
木大将が奪った。この
戦いで乃木は二人の息
子を失った。
高台から旅順港を見
ると、日本の歴史を大
きく変えた日露戦争の
勝利が満州国を誕生さ
せた。その地で自分が
生まれたことで歴史の
中に生きていることを
改めて痛感させられ
た。
（元山口放送取締役ラ
ジオ局長）